



A面



B 面



B / A



A | B



B | A

M1130《銅鐸花入》——銅鐸としての視点から

古田 浩俊

はじめに

- 1 外部の専門家による調査
- 2 銅鐸について
- 3 銅鐸M1130の観察
- 4 木村定三コレクションの中で
- 5 付属品の観察と来歴
- 6 花入への転用
- 7 銅鐸研究の中で
- 8 銅鐸としてのM1130の位置づけ

補遺——もう一つの銅鐸

おわりに

はじめに

愛知県美術館では現在、木村定三コレクション番号M1130の《銅鐸花入》を「考古遺物」に分類している¹。M1130は金属工芸品(花入)の視点からは、2014(平成26)年に刊行した『茶道具——金属工芸・竹工芸を中心に 木村定三コレクション』で、カラー図版の掲載に加えて、久保智康氏による作品解説を付して、すでに紹介している²。一方でM1130は木村定三コレクションに含まれる唯一の銅鐸という点から、銅鐸という別の視点からも紹介しておくべきと筆者は考える。実はすでに2006(平成18)年に難波洋三氏にM1130を銅鐸として調査していただいている。ところが、愛知県美術館ではこれまで銅鐸としての視点からM1130を紹介する機会を逸していた。そこで本稿では氏の調査報告を掲載することでこの銅鐸を紹介したい。しかし、この調査報告には考古学の専門家にとっては自明のことでも、ある程度の知識がないと理解し得ない専門用語などが出てくる。そこで、本稿ではまずはM1130に関するその報告を紹介したうえで、銅鐸に関する基本事項を補足しておく。さらに今後の銅鐸研究に資することを目的に、M1130についての即物的な観察結果を記載する。

1 愛知県美術館ではすべての所蔵品を「工芸」、「書」、「水彩・素描」、「写真」、「インスタレーション」、「日本画」、「資料」、「絵画」、「版画」、「考古遺物」、「立体・彫刻」、「映像」のいずれかに分類しているが、「工芸」と「考古遺物」を区別する明確な基準を未だ持ち得ていない。また、「考古遺物」は博物館学的には「考古資料」と表現すべきであるが、当館では分類上の「資料」との混乱を避けるため「考古遺物」という用語を用いている。なお本稿ではM1130の銅鐸に対して「資料」という用語ではなく「作品」という語を用いることとする。

2 長屋菜津子、村瀬可奈編『茶道具——金属工芸・竹工芸を中心に 木村定三コレクション』愛知県美術館、2014年〔以下『茶道具』(2014)とする〕、No82、105頁(カラー図版)、170頁(作品解説)。

そして最後に、これまで約500個出土している³という銅鐸のうちでM1130はどのような位置づけになるのかを確認しておきたい。

1 外部の専門家による調査

2001年に木村定三コレクションの受入れが開始されて以降、愛知県美術館ではさまざまな分野の専門家による作品調査を継続的に行ってきた。その一環として、2006(平成18)年2月1日、M1130を銅鐸という視点から京都国立博物館考古室長(当時)の難波洋三氏に調査していただき、筆者はそれに立ち会った。考古学に関しては素人である我々美術館学芸員がいちばん知りたかったのは「本物の」銅鐸かどうかという点であったが、この点については疑いを挟む余地はまったくなさそうであった。氏の説明を筆者が聞き取ったメモには、速玉神社のものが一番近いこと、扁平鈕式であること、鈕の内側を削り取っているために孔が大きくなっていることが記されている。

余談ではあるが、調査の際に、銅鐸の専門家でなくても所蔵館の学芸員として対外的にある程度の知識を持っておきたいという希望を難波氏に伝えておいたところ、報告書に同封されて銅鐸に関する基本文献のコピーが郵送されてきた⁴。素人同然の学芸員に対するその紳士な対応にたいへん恐縮したことを覚えている。

【報告書】

四区袈裟襷文銅鐸

出土地不明

弥生時代中期

金属のない面をA面、金属の付けられた面をB面とする。

身に斜格子文の横帯3帯と縦帯3帯を田の字状に組み合わせて飾る四区袈裟襷文銅鐸である。鈕の菱環部が単独の綾杉文の文様帯になっているので、扁平鈕式に属することがわかる。また、内面突帯に対応する外面に顕著な凹みがないこと、文様の条線の鋳上がりが見られることなどの特徴からみて、製作には土製鋳型が使われたと考えられるので、扁平鈕式でも新段階に属するであろう。鋸歯文は、いずれも底辺を下にし頂角を上にした状態で中に充填した斜線が右下がりになっているR鋸歯文に統一されている。この特徴は、扁平鈕式新段階でも新しい段階になってみられるようになるので、扁平鈕式新段階でも後半の製作と推定できる。弥生時代中期末、紀元前1世紀頃に製作されたと考えられる。

両面ともに欠孔が多くあり、鑄造後にこれに鋳掛けをして補修しており、B面の鋳掛けの一部では、さらに斜格子文を補刻する。

3 難波洋三 2000。

4 難波洋三 1986、井上洋一 2003。

出土後にB面の身の上部に金具を付け、鈕の内縁を取り除き、舞の大半を切り取り、さらに、身内面の下部に底を貼っており、掛花入れに転用していたことがわかる。

出土地や出土時期については不明であるが、付着している土は淡黄褐色の山土なので、丘陵や山地に埋納されていたのだろう。

(難波洋三)

2 銅鐸について

上記の報告書は的確かつ簡潔に記述されているとはいえ、いくつもの専門用語が使われており、そもそも漢字の読み方さえわからない語もある。そこで、こうした専門用語を解説することで上記報告書を理解するための一助としたい。

(1) 銅鐸とは

銅鐸は、近畿地方を中心として見出される弥生時代の国産青銅器⁵であり、その祖型は朝鮮の小銅鐸にあると考えられている⁶。銅鐸はすべて意識的に土中に秘匿された状態で見出されるので、銅鐸の用途を農耕と密接な関係を持つ共同体の祭器とする説を取れば、銅鐸は神聖であるがゆえに常日頃は土中に保管され、特別な機会つまり祭祀の時のみ取り出されて使用されたものとか、あるいは地上で使用された後共同体の変事に際し永久に地下に隠匿されたものであろうとか、いろいろの場合が考えられる⁷。前述のとおり銅鐸はこれまで約500個出土しているが、まだ出土していないものがこの数倍あると算出されている⁸。

(2) 構造

銅鐸は大きく分けると三つの部分、つまり身、^み鰭^{ひれ}、鈕^{ちゆう}からなる(図1)。

身は円形から杏仁形の断面をもち、末広がりの筒形で中空となっている。上面は平らな舞で塞がれているが、底面は開放されている。鰭は身の両側にはみ出した扁平な突出部である⁹。鈕は身の上部に付く、鐸を釣るための円環状の部分である(図2)。鈕の中で、断面が菱形の部分^{りょうかん}を菱環と呼ぶ。

このほか鰭や鈕には^{かざりみみ}飾耳と呼ばれる耳状の飾りが付くものがある¹⁰。

身や舞には方形や円形の型持孔^{かたちもちあな}と呼ばれる孔があいている。銅鐸は二つの外型と一つの

5 青銅器の原材料はおもに銅、錫と鉛で、錫の量を増やせば湯流れは良くなるが、硬度が増して鑄造後の加工がしにくく、しかも割れやすくなる(森田稔 2003、325頁)。銅は融点が約1000度と高いために錫を混ぜると融点を下げられ、純銅より低い温度で湯が作れるという長所も青銅にはある。

6 佐原真 1960、92頁。

7 前掲、104頁。

8 難波洋三 2000。

9 銅鐸を作る際に二つの鑄型外枠を合わせるが、その合わせ目の隙間にはみ出した湯の^{こうぼり}甲張が装飾化したものと考えられている。銅鐸が土に埋められる際には、横倒しにして左右の鰭を上下の向きにするのが通例である。

10 左右の鰭の上部に一つずつ飾耳^{いっつづいみみ}がつくものを^{さんづいみみ}一対耳銅鐸、鰭の上中下の3か所に飾耳がつくものを三対耳銅鐸と呼ぶ。M1130は一対耳銅鐸である。

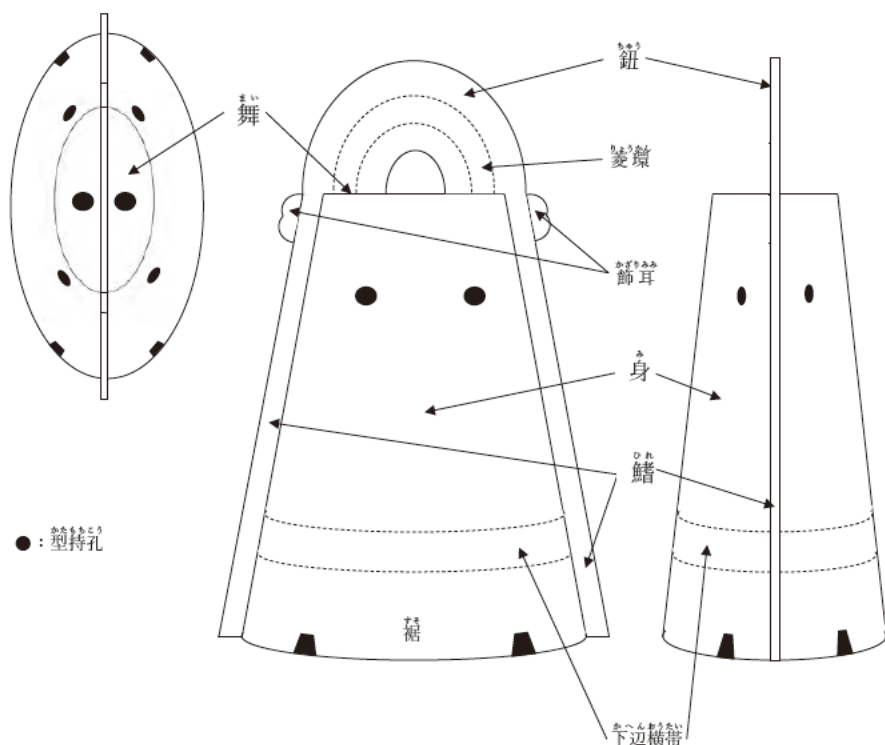


図1 銅鐸各部の名称

内型によってできる空間に熔融金属(湯)を流し込んで作られる(鑄造)ため、内型を固定して外型との空間を保持するためには支え(型持)が必要で、その型持の部分には湯が回らないので、銅鐸に孔として残る。身の下辺の左右にも同じく型持の痕跡である型持痕が見られる。

身の主文様下の横帯の文様帯を下辺横帯と呼び、そこから身の下辺端までを裾と呼ぶ。

銅鐸はもともと鐘なので、身の内側にぶら下げられた舌と呼ばれる棒が身をたたいて音が出る仕組みになっている。通常、身内面が舌と接する部分は突線が一周しており、これを内面突帯と呼ぶ。

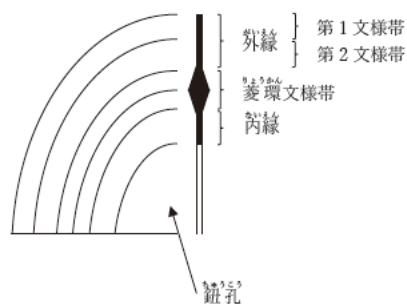


図2 鈕細部の名称

(3) 文様

銅鐸の表面を飾る文様は単なる文様ではなく、銅鐸の機能と関わる意味を持ったものという意味論的な考え方があるが¹¹、ここでは形態論的な視点のみで記述する。

11 文様は内にある穀霊(稲霊)を結びとめ、外へ出ていかないように封じ込めておく機能があるという(春成秀爾 1982、3-10頁)。

銅鐸は部分によってある程度決まった文様が使われている。身は銅鐸の中で最も広い面を占めており、ここを飾る代表的な文様は袈裟襷文と流水文である。鱗には鋸歯文が通常使われる。鈕には鋸歯文のほか渦文や重弧文などが見られ、菱環には綾杉文が通常使われる。

ここではM1130の銅鐸に使われている文様を中心に解説する。

a 袈裟襷文

袈裟襷文とは縦帯と横帯を交差させた一種の格子文様(格子文)のことで、僧侶が着る袈裟に見立てて名づけられたものである(図3)。袈裟襷文を構成する縦帯と横帯の内部は通常斜格子文で埋められている。身の片面は袈裟襷文によって通常4つまたは6つに区分けされ、それぞれ四区袈裟襷文銅鐸、六区袈裟襷文銅鐸と呼ばれる。

なお、縦帯と横帯で囲われた区画の内部は、何も表さない無文のほかに、渦文などの幾何学模様を入れたものや、動物、人物、建物など具象的な事物を図式的に表したものがあ

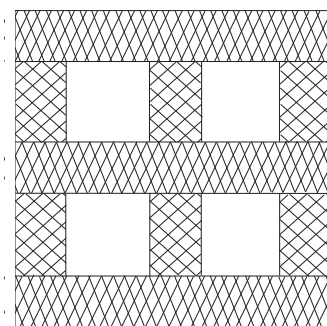


図3 袈裟襷文と縦横帯の中の斜格子文

b 鋸歯文

三角形が連なる文様(図4)。鋸の歯のように見えることから命名された。銅鐸では鱗や鈕、さらに身下部の下辺横帯に使われる。三角形の頂点を上にした時、三角形内部の斜線が右下がりのものをR鋸歯文、左下がりのものをL鋸歯文と呼ぶ(下図はR)。

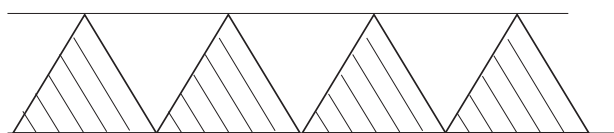


図4 鋸歯文

c 綾杉文

平行斜線文を線対称にした文様(図5)。杉の葉の形状に見立てて命名された。銅鐸では一般的に鈕の菱環に使われる。斜線が左向きをC、右向きをDとする(下図はC)。

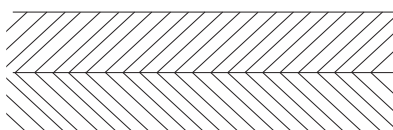


図5 綾杉文

d 流水文

M1130には使われていないが、袷襷文と並び銅鐸の身を飾る重要な文様であり、後述することになる型式にも出てくるので予め解説しておく。

数本の平行線の端部を曲折させてS字状に連ねた平行曲線文様。縦横帯の区画内に配置するものもあれば、鐸身全面を一区画として数連を組み合わせたものもある¹²。

(4) 型式

銅鐸は鈕の文様帯構成に基づいて、菱環鈕式^{りょうかんちゅう}、外縁付鈕式^{がいえんつきちゅう}、扁平鈕式^{へんぺいちゅう}、突線鈕式^{とつせんちゅう}の四つの型式に大別される¹³。古いものから新しいものへおよそこの順番で作られた。

①菱環鈕式^{りょうかんちゅう}

鈕が菱環の外斜面と内斜面の二つの文様帯からなり、鱗から続く文様帯がまだない型式。側面形で身に反りがないか身がやや外に張った1式と、身が通常通りに内湾した2式に細分される。

②外縁付鈕式^{がいえんつきちゅう}

菱環の外側に鱗から続く文様帯があり、菱環文様帯がまだない型式。

舞の型持が一個(菱環鈕式と同じ)の1式と二個(扁平鈕式や突線鈕式と同じ)の2式に細分される。また、身の上半の型持孔の位置が1式ではほぼ中横帯に接する部位にあり、2式ではほぼ上区の中位にある。

③扁平鈕式^{へんぺいちゅう}

鈕に鱗から続く文様帯があり、菱環文様帯がある型式。

石製鋳型で鋳造した古段階と、土製鋳型で鋳造した新段階に細分される。

④突線鈕式^{とつせんちゅう}

扁平鈕式のうち、突線を飾るもの。

突線の構成に基づいて1～5式に細分される¹⁴。

(5) 鋳造に関する用語

・ 鋳上がり

英語でcasting finishと訳される通り、鋳造によって型取りされた物の仕上がりの状態を指し、「鋳上りが良い」とか「鋳上りが悪い」といった使い方がされる。

12 左右に末端があり、2段の中で曲折を繰り返すパターンを横型流水文の基本形とし、これを線対称に反転して左右の端同士をつなぐと、任意の点からその点に戻る流水文ができる。これに段を加えたり省略したりして様々なパターンの流水文が作られる(横型流水文銅鐸)。横型流水文では隣接した曲折部分が作るX字形が同じ2段の中で複数作れるが、縦型流水文ではX字形はそれが一つとなる(縦型流水文銅鐸)。任意の部分から、それを構成する数本の線を同時に辿り、曲折の末、元の出発点に戻るのが流水文の原則であるが、この数本の線を同時に辿ることができないものもある(迷路派流水文銅鐸)。

13 今日では佐原真が示した大別(佐原真 1960、94-96頁)は、定説化したといってよいという(難波洋三 1986、132頁)。以下に記述する各型式の定義は、難波洋三 2011a、81頁による。

14 外周突線が2条以下か3条かで突線鈕1・2式と3～5式に大きく分けられる。1式は身の区画文に突線を用いず、2式はこれを用いる。3式は横軸突線がなく、4式は横軸突線を持つがこれが鱗を貫かない、5式はこれが鱗を貫く(難波1986、136頁)。

・ 鑄掛け

青銅などの鑄造品に生じた巣(空洞)などの欠陥個所に熔融金属(湯)を補填して正しい形に補修する方法。その補修方法についてはいまだに解明されておらず、鑄掛けした部分が後に脱落しないように、鑄造欠陥部の周辺に円形の孔を穿ち、その部分を足掛かりにとする方法を用いたものや、もとの外型に戻して行ったと考えられるものもある¹⁵。

・ 補刻

鑄掛けをした部分に鋭利な鉄製工具を使って元の文様を彫って補ったもの。本来の文様が突線で表されているのに対して、補刻部分は彫り下げた線による文様になる。

3 銅鐸M1130の観察

銅鐸に関する専門用語がある程度理解されたところで、M1130を詳細に観察しておこう。

(1) 形状、色調と保存状態

正面から見ても側面から見ても身は外にわずかに反っている。左右の鰭の上部に半円形の突起を二個一組にした飾耳が付くので一對耳である。舞は花入への加工のために鈕直下の一部を残して切り取られている。舞は水平ではなく、長辺軸から両短辺端に向かって肩下がりになっている。菱環は鈕高の中心より外寄りに位置する。後述する櫟本型^{いちのもと}の多くが持つという鈕の菱環の幅が舞近くで目立って狭くなるという特徴は見られず¹⁶、菱環はほぼ平行である。

A面は全体的に黒ずんで見えるが、B面は淡い草緑色をしている。鈕や鰭の輪郭部、身の下端部などの薄い断面部分は擦れて黒っぽい色を見せており、これが本来の色のようなものである。

A面で補修の痕跡が認められるのは、右上の型持孔の下から左にかけて、左上の型持孔の左から中横帯にかけて、中縦帯と中横帯との交差部とそれに接する右下、左縦帯の中ほど、下辺横帯下界線の右側の中ほど、同下界線左側の鰭寄りに2か所である。B面は花入の裏面だけにA面より痕跡は目立つ。右上の型持孔の下から左にかけて、左上の型持孔から右下には凹みが広がり、さらに中縦帯と中横帯との交差部(この部分には、上記報告書にある斜格子文の補刻¹⁷がある(図6))



図6 補刻された部分

15 森田稔 2003、328頁。

16 難波洋三 2009、257頁。

17 補刻は外縁付鈕2式で出現し、難波氏が確認できた補刻のある銅鐸は60個を数えるという(難波洋三 2002、81頁)。難波氏によるM1130調査前の数字である。

を経てその直下まで、身中央部の下横帯から裾にかけては大きな円形の凹みがあり、痕跡はそこから下横帯(この部分にもわずかに斜格子文の補刻が見られる)を経て右下の区画に伸びる。身の下辺右側の型持痕から中央にかけてはかなり欠損している。

(2) 装飾

① 鈕

鈕では文様の条線が比較的明瞭に見えている。内縁は切取られているため、外縁と菱環のみ残されている。文様帯を区切る界線はすべて1条である。外縁は二つの文様帯からなり、第1文様帯よりも第2文様帯の方がやや幅が広い。どちらの文様帯も鋸歯文で飾られており、鋸歯文は頂角を菱環に向けたほぼ正三角形で、内側の線はすべて右下がりなのでR鋸歯文である。A面の外縁第1文様帯の鋸歯文数は14で、鋸歯文内部の条線数は頂部の5条一つを除きすべて4条である。B面の外縁第1文様帯の鋸歯文数も14で、鋸歯文内部の条線数は4条が中心で3条もいくつか見られる。

内縁は切り取られているために文様は不明だが、後述する櫛本型の類例から無文であった可能性が高い。舞もそうであるが、装飾がなかったたからこそ躊躇なく切り取ることができたと考えられる¹⁸。

菱環は綾杉文DCである。両面ともにDCの境界は中心より少し右に寄っている。A面の菱環は内界線が1条で綾杉文は右(C)の外斜面が23条、内斜面が19条、左(D)外斜面が27条、内斜面が23条である。B面の菱環には内界線がなく、右(C)の外斜面が23条、内斜面が19条で、左(D)外斜面が27条で内斜面が23条である。つまり菱環の条数は両面ともまったく同じで、大きな違いは内界線が1条あるかないかだけである。

② 鰭

鰭は身に向かって内向するほぼ正三角形のR鋸歯文で飾られている。A面右鰭の鋸歯文数は飾耳の脚で切れているものも含め12で、左鰭は14、鋸歯文内部の条線は左右鰭ともに3から5で、5条が中心である。B面鰭の鋸歯文数は飾耳の脚と切り合っているものも含めて左右ともに14で、鋸歯文内部の条線は確認できる範囲では4条が多い。

2個一対の半円形飾耳は、半円の線条が鰭部で直線(脚)となって身までが達しており、それぞれの中に1条の線が入る。つまり片側の飾耳の脚は全部で6条である。鰭の鋸歯文との切り合いの関係は、A面右の飾耳の脚部は鰭の上下の鋸歯文との間隙があり交錯せずに独立しており、左の飾耳では下側の飾耳と鋸歯文が交錯しているが飾耳の脚が鋸歯文に優先している(図7)。B面の飾耳は左右ともに鋸歯文と切り合っている(図8)。このことから以下のことが推察できる。A面については飾耳をまず彫った後に鋸歯文を彫ったと考

18 花入に加工する際に、鈕の内縁を切り取らなくてはならない必然性はまったくない。模様のない内縁は、加工の依頼人には鑄造によるバリののように、つまり最終的な仕上げがなされていないように見えたのではなかろうか。

えられるが、B面については鋸歯文をまず彫った後に飾耳を彫った可能性もある。

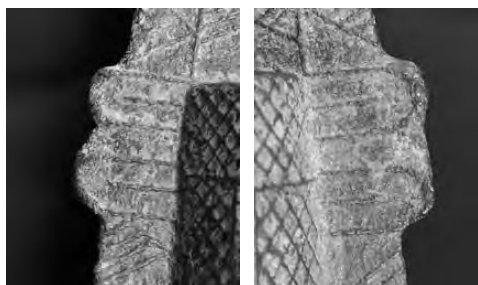


図7 A面の飾耳(左右)

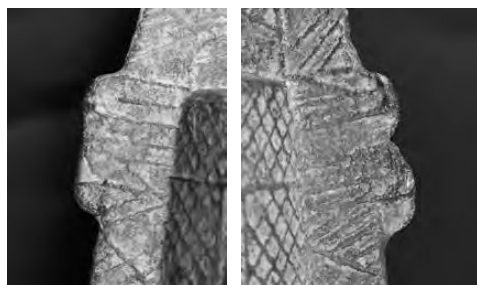


図8 B面の飾耳(左右)

③身

両面とも横帯3×縦帯3の袈裟襷文で飾られる。横帯の幅はA B面とも第1横帯が1.3cm、中・下横帯が1.6cmである。縦帯の幅はA面左から1.1、1.6、1.9cmでB面は1.3、1.6、1.3cmである。横帯縦帯ともに幅に顕著な差異はない。横帯と縦帯との切り合いの関係はすべて横帯が優先している。帯の中は斜格子文で、斜格子で作られる四角形は、場所により縦長や横長の菱形となっているがほぼ正方形である。袈裟襷文で囲まれた区画は研磨されておらず無文。高さ(幅)1.3cmの下辺横帯には頂点を上に向けたR鋸歯文が11個並び¹⁹、確認できる範囲でA面の鋸歯文内の条線は4～5条、B面は3～4条である。下辺横帯下界線は3条、間隔は4mmで、他の界線に比べ顕著に太かったり突出したりはしていない²⁰。最下の界線は裾端から4.5cmのところを位置する。裾は研磨されておらず無文。

(3) 型持

舞は切り取られているために、そこに穿たれていた型持孔の形状は不明だが、後述するとおり櫟本型の特徴のひとつに身上部と舞の型持孔が円形という点があげられるので²¹、本銅鐸の型持孔も円形であったと想像される。身上部の型持孔は花入への加工のために塞がれているが、痕跡から判断すると、第1横帯と中横帯に挟まれた上区のほぼ中間で若干上寄り、左右の縦帯寄りに位置し、原形を最も留めていると思われるA面身上部の型持孔の形状から円形であったと推測される²²。身の下縁の4つの型持痕は、いずれも欠損があるため元の形がくずれているが、比較的原形を留めているA面から判断すると縦長の台形であったと推察される。

19 B面は欠損部があるために実際には9個しか確認できないが、一つの三角形の底辺の長さから推測するとA面と同じ11個になる。

20 下辺横帯下界線を他の界線や文様の線よりもかなり太くした例は扁平鈕式新段階の中頃に現れ、扁平鈕式新段階末になるとこの特徴は多くの銅鐸群に見られるようになる(難波洋三 2021、45頁)。

21 難波洋三 2011a、96頁。

22 この型持孔の直径は1.3cmで、孔の中心は第1横帯の下端から2.5cm、中横帯の上端から3cmの位置にある。

(4) 内面突帯

内面突帯があるはずであるが、裾端から2.8cm程の所に底が張られているため下からは確認できない²³(図9)。しかし舞の切取り部から中を覗くとA面側の身と底が接合する部分に段差が認められ、これが内面突帯の痕跡の可能性がある(図10)。銅鐸下部の開口部から底を貼った際、内面突帯は底板を水平にする基準線あるいはそれ以上底が中に入らないための堰堤としてうまく利用されたのかも知れない。A面B面ともに裾右下部にわずかな線状の凹みが確認できる。凹みは舞面から18.7cm下にあり、この長さは舞の切り取り部から底までの長さとはほぼ一致するので、この凹みは内面突帯に対応する引けによる可能性が高い。そうだとすれば内面突帯は身の下縁から3.3cmの位置にあると考えられる。



図9 貼られた底



図10 舞から見た内部

(5) 法量

『茶道具』(2014)の中にある程度詳しく記載されているが、今回あらためて詳細な計測をおこなった²⁴(表1)。

(6) 型式比定

鈕に鱗から続く文様帯があり、菱環が独立した文様帯となっているので、扁平鈕式である。報告書にあるとおり、条線が明瞭で土製鑄型で作られたと考えられるため扁平鈕式でも新段階に位置づけられ、またすべての鋸歯文がRであることから新段階でも後半の製作であると考えられる²⁵。

(7) その他

B面の第1横帯と中縦帯との交差部すぐ下に、花入として柱などに掛けるための円環が取り付けられている。

23 花入に加工する際に貼られた底は、音から判断する限りではおそらく金属製である。

24 総高29.7、裾幅17.3、裾奥行9.0、鈕口7.5、鈕幅11.3、鈕厚0.4、口幅7.4、口奥行5.4(『茶道具』(2014)、170頁)。今回の計測に関しては稿末参考資料の「難波洋三 1991」を参考にし、銅鐸に関する法量計測の基本について難波氏からご教授いただいた。

25 鋸歯文をRに統一する特徴は突線鈕式の近畿式へと伝えられるという。銅鐸の型式におけるR/L鋸歯文の展開については前掲、107頁、注50を参照のこと。

				cm
全 高				29.9
最 大 幅				17.3
舞 短 径				6.3
身下端短径				9.0
A 面	身	高	中 央	21.9
		幅	上 端(舞長径)	9.2
			下 端(長径)	15.0
		厚さ	下端中央	0.21
	鰭 幅	右	上端	1.0
			下端	1.5
		左	上端	1.1
			下端	1.5
B 面	身	高	中 央	21.8
		幅	上 端	9.3
			下 端	15.0
		厚さ	下端中央	0.23
	鰭 幅	右	上端	1.3
			下端	1.5
		左	上端	1.0
			下端	1.4
鈕	高			7.5
	全幅			11.3
	幅		中央	3.5
			右下端	3.5
			左下端	3.4
	稜 環	舞面から稜環頂の高さ	A面	4.8
			B面	4.8
		幅 A面	中央	1.1
			右付け根	1.3
			左付け根	1.2
		幅 B面	中央	1.2
			右付け根	1.3
			左付け根	1.2
		厚さ	中央	0.69
			右付け根	0.61
	左付け根		0.64	
鈕 孔	舞面からの高さ			4.2
	舞面での幅			4.5
重量 g				1,205

特に表記がない場合はA面の法量とし、左右はA面から見た場合とする。

表 1 法量

4 木村定三コレクションの中で

(1) 受入れ状況と位置づけ

M1130は木村定三氏没後に美保子夫人からご寄贈いただいた作品の一つである。夫人からの寄贈品の受け渡しは、2003(平成15)年3月から8月にかけて集中的におこなっており、M1130は5月21日に受け渡された。受け渡しに際しては、ある程度のまとまりのある一群をご遺族が通常事前に準備してくれていた。この日に受け渡されたのは120件とかなり数は多かったが、そのほとんどが考古遺物に分類されるもので、お面や漆工芸品が数点ずつ入っていたものの、茶道具としては茶碗が9点あっただけであった²⁶。陶磁器などによる花入は6月6日にある程度の塊として受け渡されているので、木村氏はM1130を花入ではなく考古遺物の一つとして、つまり銅鐸として保管されていたのではないかと推察される。

現在、木村定三コレクションは3,307件を数えるが²⁷、そのうち日本の考古遺物に分類できる作品の数は多くない。とはいえ木村氏が考古遺物に関心が薄かったとは言い切れず、銅鏡の種類の豊富さとその数だけ見ても、それなりの関心の高さがうかがえる²⁸。銅鐸は銅矛などとともに弥生時代を代表する青銅器である。木村定三コレクションの中に銅鐸は1件しかないが、銅矛が2件あることから²⁹、たまたま所蔵したという以上に意識的にコレクションしたと思われる³⁰。

(2) 印刷物による紹介

これまで愛知県美術館は研究紀要で分野別の目録を刊行してきており、「銅鏡」、「金属工芸」、「環頭太刀・耳環」の各目録の中で、日本の考古遺物に分類できる作品の一部はすでに紹介している。

M1130を図版で初めて紹介したのは、2006(平成18)年刊行の非売品『木村定三コレクション』である³¹(図11)。この冊子では、木村定三コレクションに含まれる考古品の一つとして、古代中国の《青銅蟠螭文壺》とともに《四区袈裟襴文銅鐸》の名称の銅鐸として、解説なしでカラー図版のみ掲載した。この時点で作品名には難波氏が報告書に記載した名称を反映させている。



図11 『木村定三コレクション』より

26 後述のご遺族が作成した当日の受け渡しリストの表題は「日本 古代等」となっていた。

27 愛知県美術館では点数ではなく件数で所蔵品数を公表しているため、点数にすると数はさらに増える。

28 久保智康、森下章司「木村定三コレクション銅鏡目録」(鯨井秀伸編『木村定三コレクション研究紀要 2011年度』愛知県美術館、2012年)参照のこと。

29 M291《広形銅矛》(図13)、M292《銅矛》。

30 愛知芸術文化センターのアートライブラリーが所蔵する木村定三氏の旧蔵書の中で、銅鐸に関するまとまった記述があるのは、梅原末治『日本考古学論攷』六一書房、1940年(K6415)、森本六爾『日本考古学研究』桑名文星堂、1943年(K210)の2冊である。

31 村田真宏、古田浩俊、馬淵美帆編『木村定三コレクション』愛知県美術館、2006年、47頁。

同じ年度には、木村定三コレクションの中から一般来館者向けに、モノクロ図版と簡単な解説が付いたA5版の鑑賞カード15種を作っており、その中の一種が『四区袈裟襴文銅鐸』である(図12)。筆者が解説文を書くにあたり参考にしたのは、難波氏による上記報告書であった。



図12 鑑賞カード

一般の人が購入できる出版物で初めて紹介したのは、2008(平成20)年刊行の『木村定三コレクション名作選』である(図13)。「考古資料」の中の日本の「青銅器」のくくりの中で銅鐸としてカラー図版を掲載したが、作品解説は付けられていない³²。



図13 『木村定三コレクション名作選』より

「はじめに」ですでに触れたとおり、2014(平成26)年に刊行した『茶道具』(2014)では花入として扱い、カラー図版の掲載に加えて、金属工芸品(花入)の視点から久保智康氏による作品解説が付された³³(図14)。

これ以降、当館の印刷物・刊行物にこの銅鐸が取り上げられることはなかった。



図14 『茶道具』より

32 鯨井秀伸、古田浩俊編『木村定三コレクション名作選』愛知県美術館、2008年、No.93。各分野の専門家による作品解説は、調査員の許可を得たうえで調査報告書を再録させていただいたものが多い中で、銅鐸の作品解説を掲載しなかった理由は今となっては不明である。

33 『茶道具』(2014年)、No.83。

(3) 作品の展示・公開

M1130の受贈が2003年、難波氏による調査が2006年であったが、作品そのものを愛知県美術館で初めて公開したのは2008年1月からの「木村定三コレクション名作展」である³⁴(図15)。この展覧会は、木村定三氏本人からの寄贈作品に加え、氏の没後に美保子夫人からの遺品の受贈により木村定三コレクションの全貌が見えた上で開催した展覧会で、M1130は6章構成の最初の章「古代の形象」38点の中の1点《銅鐸》として展示した³⁵。



図15 木村定三コレクション名作展
(壁面展示ケースの中に展示)

2回目の公開は、2010年11月からの全館所蔵作品展「美の精髓 愛知県美術館の名品300」である。約7,600件のコレクションの中から約300点の名品を選びすぐったもので、木村定三コレクションに関しては茶道具を中心とした約50点を展示しており、M1130は《銅鐸(花入)》として展示した³⁶。

3回目は「うつし(写・映・移)」をキーワードに構成した2012年3月からの「うつし、うつくし」で、M1130は「型によるうつし」の章を構成する古今東西の27点の一つ《四区袈裟褌文銅鐸》として展示した³⁷。これを最後にM1130は愛知県美術館で展示されていない。

なお館外への貸出しは一度だけあり、2016年に愛知県陶磁資料館(現陶磁美術館)で開催された企画展「弥生への旅 朝日遺跡」で展示されている。

5 付属品の観察と来歴

縦164mm×横112mm×高さ320mmの木箱は銅鐸本体を入れるとちょうど納まる大きさなので、代用品でなくこの銅鐸を納めるために作られたものと思われる(図16)。表面は黒色化し、角も取れているので、古めかしさが感じられる。蓋表右端に筆で「唐物 底付 喚鐘」と書かれている。側面には「ホー八二六 古銅地紋宝鐸 小」と「唐物喚鐘花瓶」と筆記された二枚の札が貼られている。これらのことから旧蔵者が一人ではなく、何人かの手を経てきていることがうかがわれる。



図16 風呂敷と木箱

34 この展覧会については古田浩俊「木村コレクション追想」『愛知県美術館研究紀要 第28号 木村定三コレクション編』愛知県美術館、2022年、65-66頁を参照のこと。

35 『愛知県美術館年報2007年度版』愛知県美術館、2008年、24頁。

36 『愛知県美術館年報2010年度版』愛知県美術館、2012年、22頁。

37 『愛知県美術館年報2011年度版』愛知県美術館、2013年、23頁。

ここで断っておくが、付属品の作為性を指摘することはできても作為性がないことを証明することは難しいので、ここでは付属品は真正であるという前提で稿を続けることとする。この前提が誤りであれば、以下の論が成り立たないことは言うまでもない。

二枚の札のうち前者の「ホー八二六」に関しては、この札を貼った時の旧蔵者が保管の際に付した管理番号であろう。「ホ」はイロハ順で5番目になることだけでも、この旧蔵者が相当数の作品をコレクションしていたことが想像される。「一八二六」が通し番号だとすればイロハのそれぞれに平均365点が属していたことになる。コレクションが「ホ」で終わるとは考えにくいので、これが真ん中としてヌまであったとしたら3,650点という膨大な数になる。実際そこまであったかは不明ではあるが、この札からは、この旧蔵者がこの銅鐸を含め相当数のコレクションを持っていたことが想像される。また、「小」とあるからには「大」もあると考えられるので、この旧蔵者のコレクションの中にはM1130の銅鐸より大きな銅鐸もあったのであろう。

前者の札には「宝鐸」という語が用いられている。「宝鐸」は銅鐸の別名・古称である³⁸。しかし花入に相当する文字は見当たらない。一方後者の札では銅鐸を「喚鐘」と呼んで³⁹、用途が「花瓶」(花入)であることが明示されている。このことから、最初の札が貼られた時には、花入に加工される前の銅鐸が納められていた可能性がある。その後、花入(花瓶)に転用された後に、後者の札が貼られたと考えるのが自然である。蓋の文字が後者の札の文字に似た筆跡であり、そこにはわざわざ「底付」と記しているので、蓋書きも後者の札と同じ所蔵者の時になされたと考えられ、筆者が想定する札が貼られた順番と矛盾しない。

この他、印が押された紙の断片の上に別の印を押した紙が貼られている。下の朱文方印は右上と左下部分の断片しか残っていないので文字は不明である⁴⁰。上の印は白文長方印であるが、文字は解読できない。

銅鐸は空色の粗目の綿布に包まれて木箱に収められ、その木箱は約80cm四方の縦柄の渋い風呂敷に包まれていた。風呂敷の一角に三角形の布を当てて木村氏が中身を記載するのが常であるが、この風呂敷の一角には三角の白い布を当てているが何も書かれていない(図16)。受け入れ時の美術館側の記録には「銅鐸 唐物喚鐘花瓶 上代 大谷家 本願寺旧蔵」と記しているが、「大谷家 本願寺旧蔵」の部分については、M1130の付属品からは得られない情報である。実はある時期から受け渡し時に事前にご遺族がリストを作成してくれており、そこには「銅鐸」「唐物喚鐘花瓶 大谷家 本願寺旧蔵」「上代」と記されていたので、これをそのまま受け渡された作品の記録として書き写したわけである。

38 平安時代の歴史書『扶桑略記』に天智天皇7(668)年、近江の崇福寺の建設中に「宝鐸」が出土したという記述がある。「七年戊辰正月十七日。於近江國志賀郡。建崇福寺。始令平地。掘出奇異寶鐸一口。高五尺五寸。」「国史大系 第6巻 日本逸史 扶桑略記」経済雑誌社、1897-1901年、520頁。

39 東京文化財研究所が所蔵する第二次世界大戦終結以前に発行された売立目録2,328件に掲載されている約337,000件の情報を検索すると(<https://www.tobunken.go.jp/archives/文化財関連情報の検索/売立目録作品情報>：最終閲覧日2022年5月7日)、「銅鐸」が22件に対し「喚鐘」は45件がヒットする。このことから、古美術の流通の世界で戦前戦中期には「銅鐸」よりも「喚鐘」の方が呼称として一般的であったものと推察される。

40 遠藤一作編『大谷家御贓品写真帖』(1913年)の扉には「大谷家什寶」の朱文方印の印影が掲載されており、これと比較すると左下のわずかな断片からでも同一の印ではないことだけは確認できる。

木村氏が遺した手帳によれば、「袈裟襷文上代銅鐸」(M1130)を入手したのは1947(昭和22)年であり、来歴に関しては「大谷家(東本願寺傳來)」と「大谷家(本願寺)旧蔵」の2種の記載がある⁴¹。大谷家伝来を証明するような付属品がないことから、おそらく木村氏がM1130の購入時に購入先からそのように口伝えされたのであろう。木村定三コレクションの考古遺物には箱や風呂敷などの付属品に出土地が記されたものがいくつもあることを鑑みると、M1130の銅鐸に関して木村氏は購入先から出土地に関する情報は得ていなかったと考えられる。

さて、M1130の来歴を探る手掛かりとして、筆者は売立目録に注目した。もしかすると数ある入札目録のどこかにM1130に同定できるものが出ているかもしれないからである。M1130は大谷家伝来とされており、大谷家(本願寺派[西本願寺])旧蔵品の入札が1913(大正2)年に行われ、合計で1,000点を超える作品が出品されている。それらは西本願寺の作品なので、M1130が東本願寺伝来だとすれば関係ないはずだが、大谷家(本願寺)という点では掲載されている可能性もあるので、念のために確認してみた⁴²。結果としては残念ながらM1130に該当するものを見出せなかった。もちろん目録にすべての売立品が掲載されているわけではないので、掲載されなかった売立品の中にM1130が含まれていた可能性がまったくないとは言い切れないが、含まれていたということを証明することもできない。

来歴の手掛かりとなりそうな資料に、一括して愛知芸術文化センターのアートライブラリーに収蔵された木村定三氏の旧蔵書がある。その中には売立目録類が50冊余り含まれている⁴³。それら目録は大正末から昭和の10年代までのものなので、M1130を木村氏が入手した時代のものは含まれていない。しかし大正末から昭和の10年代は、大正2年生まれの木村氏の10代前半から30代後半にあたっており、氏は学生時代からコレクションを始めていた⁴⁴というのだから一部はコレクションの形成時期と重なっている。そこで念のためにこれら全冊を調べてみたが、M1130に該当する作品は掲載されておらず、残念ながら手掛かりは得られなかった⁴⁵。

41 氏の手帳については以下を参照のこと。足立好弘、長屋菜津子「特別寄稿 『木村定三手帳等の資料』について」『愛知県美術館 研究紀要 第24号 木村定三コレクション編』愛知県美術館、2018年、15-21頁。なお、これらの手帳は当館に寄託されていたが、2021年度に寄贈された。筆者は2022年6月に美保子夫人とこれら手帳の利用に関して面談し、閲覧できるのは学術目的とする当館の学芸員のみ、個人情報に関わる引用はしないといった条件が2072年(木村定三氏没後70年)までという条件を夫人に了解していただいた。

42 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/949964>; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9499645>; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/949966>(2021年7月7日閲覧)第4回の目録はなし。これらの売立に関しては以下の文献を参照した。坂本博司「翁と初雪は西の御蔵へ―名物茶壺と錫の壺―」『本願寺資料研究所報』37号、本願寺資料研究所、2009年。氏によれば、売立の出品数は第1回675点、第2回517点、第3回383点、第4回751点であった。

43 愛知芸術文化センター編「蔵書目録」『木村定三コレクション研究報告書2 2007 コレクター木村定三研究の基礎資料』(高橋秀治、長屋菜津子、志水明子編)愛知県美術館、2008年、71-72頁。

44 古田前掲、「木村定三コレクション追想」52頁。

45 公的な機関としては売立目録の最大のコレクション(明治後期から昭和に発行された2,532冊)を持つ東京文化財研究所が、近年それらをデジタルアーカイブ化し、同研究所の専用端末で閲覧できるようになったが、筆者未見である。

6 花入への転用

木村定三コレクションには銅鐸に似た形をした青銅器《牧牛神》(M2428)がある(図17)⁴⁶。この作品について木村氏は、穴を利用して花生に使用したら面白いということを手帳に記している。ここには、花入に加工されたM1130の銅鐸を木村氏が入手したのと同様な嗜好性が見られて興味深い。



図17 青銅器《牧牛神》

M1130の銅鐸は出土後に花入に加工・転用されているのだが、誰かの偶然の思い付きでそのようなことが行われたのだろうか。実は同じような例はかなりあり、難波氏によれば、現在、花器として使うために出土後に加工したかどうかを確認できた銅鐸450個のうちの一割余りの46個が花器に使われているという⁴⁷。銅鐸がかなり高い比率で花器に転用された背景として、茶の湯の世界では青銅や青磁の花器が一番格式が高く、「茶の湯の世界における古代の青銅器を模倣した青銅製花器の珍重を下地として、日本出土の古代青銅器である銅鐸も花器に使うようになった」らしい⁴⁸。

氏によれば、全高30cm程の銅鐸あるいはさらに小さい銅鐸では、身の下部に小さな孔を穿ち、そこに金具をつけて天地逆にし、壁や柱に掛けて使う例が多く、全高40cm程の大きさのものは、身に花を差し入れる大きな孔を開けるものや、鈕や身の下部を切り取りそのまま置いて使う例もかなりあるらしい⁴⁹。前者つまり高さ約30cm以下の場合、確かに銅鐸の天地を逆にした使用法により舞が底になるので、大掛かりな加工をせずに済むという利点がある。一方で高さ約40程のものは高さを抑えるために鈕や身を大きく切り取るなど、かなり大胆な加工がされる。天地をそのままに置くというのだから、水を受ける器を空洞の身の中に見えないように置いて使うのであろう。

46 受贈時の記録ではスキタイのものとされているが、詳細は不明である。銅鐸でいうところの身の両面に人面(牧羊神)が突線て表されている。

47 難波洋三 2011b、178頁。本論以前に同氏は同主題による論考を執筆している(難波洋三 2006)。

48 前掲、186頁。

49 前掲、179頁。天地逆にして花器に転用された一例は、東京国立博物館の1089ブログで紹介されている(井上洋一 2012: <https://www.tnm.jp/modules/rblog/index.php/1/2012/11/02/奇妙な銅鐸/最終検索日:2022年4月28日>)。また京都国立博物館が所蔵する全高20.4cmの亀山型の四区袈裟襷文銅鐸(台帳番号J甲463)には花生に転用された痕跡を示す穿孔が身中央下部にあり、この孔の位置から判断すると花生に転用された際に天地逆に使われたことがわかる。

さてM1130は全高約30cmだから、大きさとしては前者に分類されるが、加工法としては異例である。このサイズであれば天地を逆にして掛けて使えるように加工するのが通例ということになる。しかしM1130では、より手間のかかる加工、つまり水を溜めるために身の下部内面に底板を張り、花が挿せるように舞を切り取って大きな孔を開け、天地を逆にすることなく使うように加工されている。大掛かりな加工は全高40cm程の銅鐸に見られるものなので、M1130の加工法は後者の加工法を前者に適用したものと考えられる。後者の加工例を知っている発注者がM1130の加工を依頼したのではないかと想像される。

それではこうした加工はいつごろ行われたのか。前記『茶道具』(2014)では、M1130の製作年を明治～大正時代(一九～二十世紀)としており⁵⁰、原品を弥生時代中期と記しているのだから、花生への加工の時期が明治～大正時代と解釈できる。難波氏は改変の時期が確認できる銅鐸を調べ、明治初年頃の例を最後に、それ以降に花器に加工されたことが確認できる銅鐸は今のところなく、銅鐸の花器への改変転用が江戸時代に盛んになされたことを明らかにした⁵¹。こうしたことからM1130の花入への改変の時期についても、江戸時代まで遡れるのではないだろうか。背面に付けられた鉄製の鑲が金属工芸の視点から明治～大正時代のものとするならば、M1130は江戸時代に花生に改変された後に明治～大正時代になって現在の鑲に付け替えられたと考えるのが妥当に思われる。

7 銅鐸研究の中で

前述のとおり、木村定三氏がM1130の銅鐸を入手したのは1947(昭和22)年である。木村氏は自身のコレクション内容を公にすることがなかった⁵²、この銅鐸の存在が知られることは少なくとも木村氏の生前にはなかった。筆者の知る限りでは、この銅鐸が登場する文献も確認できていないので、その存在が公になったのは愛知県美術館が所蔵してからのことになる。今後、何らかの文献でM1130と同定できるものが見出される可能性がないとも限らないが、少なくとも木村氏が入手してから約80年の間、秘蔵されていた銅鐸であったことは確かなようだ。

難波氏に本銅鐸の調査をしていただいたことを契機として、本銅鐸を愛知県美術館が所蔵していることが考古学(銅鐸研究)の世界でも知られることになっていく。京都国立博物館から奈良文化財研究所に移られた氏は、2009年の「唐古・鐘遺跡で作られた銅鐸」の中で、M1130の図版を使用している⁵³。これはM1130が館外の刊行物で図版掲載された最初であり、しかもそれが考古学の文献の中で使われたのは、M1130が銅鐸として認知されたことの証左でもあった。当館にとって図版掲載以上に重要なのは、この論文によってM1130の銅鐸

50 『茶道具』(2014)、170頁。

51 難波洋三 2011b、189-190頁。

52 木村氏のコレクションで研究者等に知られていたのは、与謝蕪村と浦上玉堂の重要文化財指定品3件6点の他には熊谷守一や小川芋銭など、ごく限られたものに過ぎなかった。

53 難波洋三 2009。M1130の図版は256頁の「写真2 櫛本型①」に「1 伝奈良県櫛本出土鐸」「2 出土地不明熊野速玉大社藏鐸」「4 伝滋賀県出土辰馬423鐸」とともに「3 出土地不明愛知県美術館藏鐸(木村定三コレクション)」として図版掲載された。

としての位置付けがなされたことである。そこで少し長くなるが、この論文のM1130に関わる部分を以下に要約する。

唐古・鍵遺跡は奈良盆地のほぼ中央に位置する弥生時代の巨大環濠集落であり、この論文はこの遺跡でどのような銅鐸が作られ、当時の銅鐸分布圏内においてこの地での銅鐸生産がどのようなものであったかを明らかにすることを主旨としている⁵⁴。同遺跡から出土した土製の銅鐸鑄型は、初期には小型の銅鐸の製作に使われており、その後、大型の銅鐸の製作にも使われるようになったようである。小型の土製銅鐸鑄型外枠は6個分出土しており、これら小型の土製銅鐸鑄型外枠を使って鑄造するのに適した銅鐸の大きさは全高30cm前後となる。突線鈕式の銅鐸で全高30cm前後の例は東海派⁵⁵の愛知県小島鐸⁵⁶しかない⁵⁷ので、北島が指摘するように⁵⁷、この遺跡出土の小型の土製銅鐸鑄型外枠は扁平鈕式新段階の銅鐸の鑄造に使ったと考えられる。扁平鈕式新段階の銅鐸の中で最も多く作られた正統派の六区袈裟襷文銅鐸⁵⁸は最小でも全高39cm以上あり、この段階の流水文銅鐸も全高40cm以上だから、小型の土製銅鐸鑄型外枠を使って鑄造した銅鐸はこれらの銅鐸ではありえず、東海派の銅鐸か東海派以外の四区袈裟襷文銅鐸となる。しかし、この遺跡出土の銅鐸片や石製銅鐸鑄型には東海派との関係を示す特徴はなく、この遺跡で扁平鈕式新段階に東海派銅鐸が作られたとは考えにくいので、小型の土製銅鐸鑄型外枠を使って鑄造した銅鐸は、東海派以外の四区袈裟襷文銅鐸のいずれかであろう。扁平鈕式新段階の全高30cmあるいはそれよりも小さい四区袈裟襷文銅鐸の中で、最も製作数が多いのは亀山型⁵⁹である。しかし亀山型は大和では出土しておらず、阿波・丹波・摂津・河内・紀伊といったより西の地域で出土していることに加え、亀山型が四国東部に拠点を置く工人集団の製品である六区袈裟襷文正統派⁶⁰と密接な関係があることから亀山型がこの遺跡で作られたとは考えにくい。以上の検討を踏まえて東海派と亀山型を除けば、扁平鈕式新段階の四区

54 難波氏は別の論文で、唐古・鍵遺跡は銅鐸製作地としては一貫して周辺的なものにすぎなかったということと、この遺跡では、外縁式鈕2式段階には一対耳四区袈裟襷文銅鐸の生産が始まり、扁平鈕式新段階末頃まで作り続けられたということ指摘している(難波洋三 2011a、106頁)。

55 東海派とは扁平鈕式新段階から突線鈕1・2式にかけて近畿・東海地方に偏って分布する銅鐸群のこと。扁平鈕式新段階になると、東海地方では西方からの銅鐸の流入が途絶え、あるいはそれを拒絶するようになり、排他的に特定の銅鐸群のみが分布するようになる。東海派に属する銅鐸は、扁平鈕式新段階4個、突線鈕1式7個が出土している。東海派と命名されているが、扁平鈕式新段階のものは畿内に偏って分布し、突線鈕1式のうちで出土地が判明している4個は東海地方の出土である(難波洋三 2001、75-76頁、再録2002、92-94頁)。東海派はやがて三遠式へと統合されていく。

56 明治時代に西尾市小島で発見された全高31.3cmの六区袈裟襷文銅鐸で、現在は東京国立博物館蔵(『東京国立博物館図版目録 弥生遺物篇(金属器)増補改訂』中央公論美術出版、2005年、No.19、23頁)。難波氏の分類では、東海派の突線鈕式C類(外周が突線2条と細線1条の組み合わせで環濠の外界線は突線化していない)で、飾耳の脚の条数が多い点や、下辺横帯だけでなく鰭や鈕の鋸歯文もすべてRとLの交互配列になっている点など、C類の中でも新しい特徴が目立つ(難波洋三 2011a、100頁)。

57 北島大輔 2002、62頁。

58 多様な銅鐸群がある扁平鈕式新段階の銅鐸141個の中心となっているのが六区袈裟襷文正統派で、このうちの87個(62%)を占めている(難波洋三 2011a、91頁)。全高は通常約42cmである(前掲、94頁)。

59 扁平鈕式新段階の四区袈裟襷文銅鐸の銅鐸群のうち、身が扁平で舞の短径が長径の40～55%しかなく、全高21cmあるいは26cmと小型で、極めて粗製な点に特徴を持つ。近畿地方と徳島県で25個見つかった(難波洋三 2011a、95頁)。

60 名東型は扁平鈕式六区袈裟襷文銅鐸の中でも特徴的な銅鐸群で、身が扁平で、鰭に三対の飾耳があり、区画内と裾を研磨あるいは削いで仕上げており、六区袈裟襷文正統派の全高が通常は42cm前後であるのに対し、全高39～41cmとやや小型である。12個出土しているが、出土地が判明しているものは四国東部に出土が集中している。身が扁平である、下辺横帯や左右の縦帯を略化した例があるといった特徴が、扁平鈕式新段階の四区袈裟襷文銅鐸の亀山型と共通しており、これらの特徴は亀山型の影響を受けた可能性がある(難波洋三 2011a、93頁)。

袈裟襷文銅鐸でこの遺跡出土の小型の土製銅鐸鋳型外枠を使って鑄造するのに適した全高30cm前後ものは、以下の5個になる。

- ①伝奈良県^{いちのもと}橿本出土鐸
- ②出土地不明熊野速玉神社蔵鐸(図18)
- ③出土地不明愛知県美術館蔵鐸
- ④伝滋賀県出土辰馬423号鐸
- ⑤広島県世羅鐸

この遺跡出土の土製銅鐸鋳型を使って鑄造した四区袈裟襷文銅鐸は一对耳鐸の可能性が高く、①～④がこれに相当する。①～④は一对耳の他に、菱環が外寄りの位置にある⁶¹、鋸歯文がほぼ三角形である、外縁第2文様帯に頂を菱環に向けた鋸歯文を飾る、内縁が無文である、鈕の文様帯界線がすべて単線である、下辺横帯の下界線が3条である、裾が上下に広い、舞と身の上半の型持が円形であるなどの共通の特徴を持っている。中でも②と③は、菱環の幅が狭い、全高が30cm弱とあまり例のない大きさである、区画内や裾を研磨しないなどの点も共通しており、鰭や下辺横帯の鋸歯文数、縦横帯幅、区画の上下幅もほぼ同じで、同一工人集団の製品の可能性が高い。④は菱環の幅が舞近くで目立って狭くなるという類例の少ない特徴が②と共通しているので、これも同じ工人集団の製品の可能性がある。①は②～④を作った工人集団がこれらに先行して作った銅鐸の可能性があり、これらの祖型とできるかも知れない。ここでは②～④に①と中芳養鐸と^{なかはや}島根県加茂岩倉1・2号鐸の大型銅鐸3個を一括して^{いちのもと}橿本型とする。唐古・鍵遺跡出土の土製銅鐸鋳型を使って鑄造した銅鐸は、この橿本型の中に含まれている可能性が高い。橿本型が複数の工人集団を含んでいるとしても、それらの集団は系譜的に近い関係にあった可能性は高い。



図18 出土地不明熊野速玉神社蔵鐸

以上難波氏の論文からM1130に関わる部分を要約・引用したが、M1130の視点から上記論文を見直すと、以下のことが指摘できる。M1130に最も近い銅鐸は出土地不明熊野速玉神社蔵鐸であり⁶²、これらは同じ工人集団によって作られた可能性があること。M1130は難波氏が呼ぶところの橿本型という一群の銅鐸のひとつであり、それらを作った工人集団は単一でなかったとしても系譜的に近い関係にあった可能性が高いこと。伝奈良県^{いちのもと}橿本出土鐸が祖型かもしれないこと。さらには唐古・鍵遺跡出土の小型の土製銅鐸鋳型を使って鑄造された可能性があることである。最後の点に関して言えば、M1130の製作地について

61 M1130は鈕高が7.5cmなので菱環が鈕の真ん中にあるとすれば、舞面から菱環頂の高さはその半分の3.75cmになるはずであるが、実際には4.8cmあるので菱環は約1cm外寄りになっている。

62 前述のとおり、難波氏は2006年にM1130を調査した際にすでにこのことを指摘していた。

の一つの具体的な可能性が示されたという点できわめて重要な指摘である。

M1130を示す「出土地不明愛知県美術館蔵鐸」の名称が出てくる文献がもう一つある。同じく難波氏による「銅鐸群の変遷」(難波洋三 2011a)である。難波氏が「銅鐸研究の金字塔」⁶³と呼ぶ佐原真の「銅鐸の鑄造」(佐原真 1960)が礎を築いた銅鐸の型式学的研究を深化・発展させ体系化したものである。M1130が属する櫟本型については「扁平鈕式新段階の四区袈裟襷文銅鐸の銅鐸群」の章⁶⁴に記述があるので、前述の論文と重複する部分もあるが、ここでM1130に関わる部分を先に要約しておく。

櫟本型は扁平鈕式新段階の四区袈裟襷文銅鐸のうち、一对の飾耳を鱗に持ち、全高が約30cmあるいは約46cmのもので、身の上半と舞の型持が円形である、菱環の幅が舞近くで目立って狭くなる、鋸歯文はほぼ正三角形である、下辺横帯の下の方の界線が3条である、外縁第2文様帯には頂角を菱環に向けた鋸歯文を飾るといった特徴を持つ。櫟本型の少なくとも一部は、唐古・鍵遺跡出土の鑄型外枠を使って作られたのであろう。櫟本型は6組7個のうち4組5個が鋸歯文をRに揃えており、それらは扁平鈕式新段階でも後半に作られたと考えられる。

さて、M1130が属する扁平鈕式新段階には、六区袈裟襷文正統派を中心に多様な銅鐸群があり、「出土地不明愛知県美術館蔵鐸」はそれら銅鐸群の併行関係を述べた章の中の「鋸歯文内の斜線の方向」の節⁶⁵に登場する。以下この節を要約する。

鋸歯文を意識的にRに揃えたと考えられる例は扁平鈕式古段階以前にはない。六区袈裟襷文正統派1a式⁶⁶の多くはR鋸歯文とL鋸歯文を混用していたが、1b式を経て2式になるとRに揃えた例が7割近くになる。四区袈裟襷文銅鐸では亀山型B3類⁶⁷の大半は鋸歯文をRに揃えるようである。鋸歯文をRに揃える例は櫟本型にも多くあり、出土地不明熊野速玉神社蔵鐸、出土地不明愛知県美術館蔵鐸、島根県加茂岩倉1号鐸、これと同範の同26号鐸、伝滋賀県出土辰馬423鐸がこの特徴を持つ。このほかに出土地不明名古屋博物館蔵鐸もRに揃える。流水文銅鐸では高住型⁶⁸の鳥取県高住鐸がRに揃える。鋸歯文をRに揃えるこれらの銅鐸は、六区袈裟襷文正統派の出現後に製作されたと判断でき、1b式の出現後に作られた可能性が高い。

この論文の中でM1130にとって重要な指摘は、櫟本型が後述する六区袈裟襷文正統派の閏賀型の一部あるいは加茂岩倉8号鐸型の祖型となった可能性があるという指摘である⁶⁹。

63 難波洋三 2011a、107頁。

64 前掲、95-97頁。

65 前掲、101-102頁。

66 六区袈裟襷文正統派の細分は、菱環の付け根に平行線がないものを1式、あるものを2式とし、さらに菱環文様帯が二区構成のものを1a式、四区構成のものを1b式とする(難波洋三 1986、141頁)。六区袈裟襷文正統派は全体として1a式→1b式→2式と変化したと考えられる(難波洋三 2011a、91頁)。

67 亀山型は左右の縦帯があるA類とこれらが無いB類に大別される。さらに左右の縦帯が斜格子文のA1類と無文のA2類に、全高約21cmと小型なものをB1類とし、B類のうち鋸歯文が細長い、縦横帯の界線がすべて複線である、外周輪郭に明確な線を巡らす、菱環文様帯を四区に分割するという特徴をもつものをB3類とし、こうした特徴を持たないものをB2類とする。亀山型はA1類→A2類→B1類→B2類→B3類と変化した(難波洋三 2003、3-6頁)。

68 本稿152頁「明石型」[高住型]の項を参照のこと。

69 難波洋三 2011a、94頁。櫟本型と同様に、閏賀型や加茂岩倉8号鐸型も系列は扁平鈕式新段階で途絶する。

8 銅鐸としてのM1130の位置づけ

銅鐸群の変遷

M1130がすべての銅鐸の中でどのような位置づけにあるのかを調べるために活用させていただいた文献は、難波氏の前掲論文「銅鐸群の変遷」(難波洋三 2011a)である。以下、この文献をもとに稿を進めることにする。銅鐸は大きさ、形態、装飾がきわめて多様なため、それらを詳細に比較検討することで、同一工人集団が作ったと考えられる「群」や、複数の工人集団が作った可能性がある「派」を抽出できる⁷⁰。銅鐸群の変遷を簡単に要約すると、菱環鈕式には明確な銅鐸群がなく、複数の工人集団が併存することが確認できるようになるのは外縁付鈕式になってからで⁷¹、扁平鈕式新段階の終わりには10以上の工人集団が各地で特徴のある銅鐸を作るようになる。次の突線鈕式になると工人集団の統合が始まり、後半には近畿式と三遠式の2系列のみが併存するようになる⁷²。

M1130の位置づけを確認するにあたり、これが櫟本型のひとつであるということを踏まえうえて、一對耳四区袈裟櫟文銅鐸の型式ごとの変遷という縦軸と、扁平鈕式新段階における銅鐸群という横軸の両方から見てみることにする。

M1130は扁平鈕式新段階の櫟本型いちのもとと呼ばれる銅鐸群のひとつとされている。前述のとおり櫟本型には以下の銅鐸が含まれる。

- ①伝奈良県櫟本出土鐸(一對耳)
- ②出土地不明熊野速玉大社蔵鐸(一對耳)(図21)
- ③出土地不明愛知県美術館蔵鐸(一對耳)
- ④伝滋賀県出土辰馬423号鐸(一對耳)
- ⑤広島県世羅鐸(飾耳なし)
- ⑥和歌山県中芳養鐸(一對耳)
- ⑦島根県加茂岩倉1・26号鐸(一對耳・同範)

四区袈裟櫟文銅鐸の系譜

櫟本型に共通する大きな特徴は(一對耳の)四区袈裟櫟文銅鐸であるということである。そこでまずこの系譜をたどっておくことにする。

70 前掲、80頁。

71 前掲、81頁。

72 銅鐸の変遷の中で最大の画期は近畿式と三遠式の成立である(難波洋三 2021、31頁)。近畿式銅鐸は大福型と迷路派流水文銅鐸の統合を核とし、横帯分割型(注76参照)も関与して成立し、三遠式銅鐸は東海派が横帯分割型の軸突線を採用して成立した(難波洋三 2011a、104頁)。近畿式銅鐸は、鈕の頂に双頭渦文飾耳を付け、身の縦横帯を斜格子文で飾ることなどを特徴とし、近畿地方を中心に畿内周辺部と紀伊西部、近江、伊勢、尾張、三河、遠江などに分布する。近畿式にやや遅れて成立した三遠式銅鐸は、鈕の頂に飾耳がなく、身の横帯に綾杉文を飾ることなどを特徴とし、三河、遠江を中心に限られた地域に分布する。

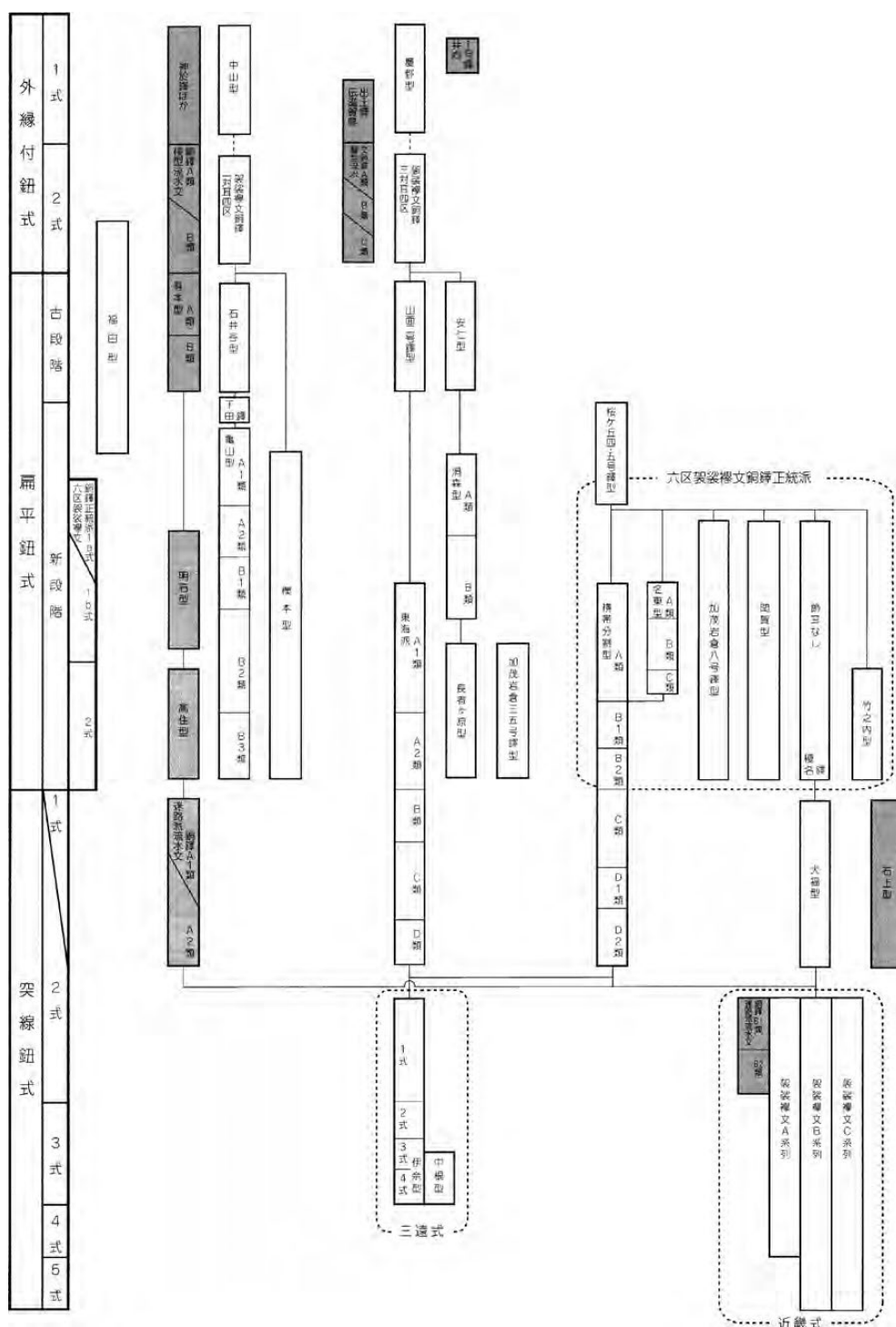


図19 銅鐸群の変遷(難波洋三 2011a)

[外縁付鈕1式]

先述の通り、明確な銅鐸群を確認できるのは外縁付鈕1式からで、この型式の中で四区袈裟襴文銅鐸の中心は6組20個ある中山型で、外縁付鈕1式の四区袈裟襴文銅鐸の半分弱を占めている。その特徴は、菱環の外斜面に途中で斜線の変える有軸綾杉文を飾り、菱環の内斜面は稜に頂角を向けた鋸歯文を飾ること。縦横帯と身の側縁の間に、第1横帯の上端から下辺横帯の下端まで一続きの縦の界線があること、横帯優先であることである。最後の、横帯が優先していると特徴はM1130にも共通している。中河内の平野部が中山型の製作工人集団の拠点の有力な候補地である。



図20 四区袈裟襴文銅鐸
(中山型)
九州国立博物館蔵

[外縁付鈕2式]

次の外縁付鈕2式の約3割を占める最も有力な銅鐸群は横型流水文銅鐸であるが、これと共通する特徴を多く持っているのが一對耳四区袈裟襴文銅鐸である。一對耳四区袈裟襴文銅鐸は、この外縁付鈕2式の段階で成立した。外縁付鈕2式の古い段階では両者と同じ工人集団が製作していた可能性があり、ある段階で横型流水文銅鐸と一對耳四区袈裟襴文銅鐸を別の工人集団が製作するようになったと考えられる。なお、横型流水文銅鐸でM1130と同じ一對耳のA類は、三對耳のB類より全体として古いと考えられる。唐古・鍵遺跡出土の石製鋳型から、外縁付鈕2式の大型の一對耳四区袈裟襴文銅鐸の少なくとも一部は大和で製作されたと考えられる。

[扁平鈕式古段階]

扁平鈕式は外縁付鈕2式の横型流水文銅鐸あるいはそれと関係の深い一對耳四区袈裟襴文銅鐸が変化する過程で生み出された。この段階の最も有力な銅鐸群は横型流水文銅鐸の有本型であるが、これに次いで有力となったのが一對耳四区袈裟襴文銅鐸の石井谷型である。石井谷型には有本型のような大型品はなく、全高30cmか20cmの小型品である。石井谷型は鈕と鱗の鋸歯文の斜線を左右対称(ほとんどは右半がL鋸歯文で左半がR鋸歯文)である、鋸歯文がほぼ正三角形である、菱環の稜の頂の舞からの高さが鈕高のほぼ2分の1である、鈕の外縁第2文様帯に連続渦文を飾る例が多いという特徴をもつ。



図21 桜ヶ丘13号銅鐸
(石井谷型)
神戸市立博物館蔵

石井谷型のこれらの特徴のうち、M1130と共通するのは、一部が全高30cmであることと、鋸歯文がほぼ正三角形であることである。

石井谷型の製作工人集団の拠点は播磨にあった可能性がある。この段階の一对耳四区袈裟襴文銅鐸には石井谷型に属さないものもかなりあり、外縁付鈕式2式と扁平鈕式新段階の一对耳四区袈裟襴文銅鐸の一部は大和で作られたと考えられるので、扁平鈕式古段階の一对耳四区袈裟襴文銅鐸の一部も大和で作られた可能性は高い。

[扁平鈕式新段階]

扁平鈕式新段階の**亀山型**は扁平鈕式古段階の石井谷型を祖型とする。亀山型は25個と出土数は多く、身が扁平で全高約21cmあるいは約26cmと小型で、A1類はまだ古段階の一对耳四区袈裟襴文銅鐸の特徴を多く残しているが、その後の粗製化は著しい。



図22 出土地不明銅鐸
(亀山型A2類)
京都国立博物館蔵

M1130を含む**櫟本型**は、扁平鈕式新段階の四区袈裟襴文銅鐸のうち、一对耳で全高が約30cmあるいは約46cmのもので、6組7個ある。亀山型のように扁平化や粗製化はせず、身の上半と舞の型持は亀山型が1例を除いて方形なのに対して円形である。また、菱環の幅が舞近くで目立って狭くなる、鋸歯文はほぼ正三角形である、下辺横帯の下界線が3条である、外縁第2文様帯には頂角を菱環に向けた鋸歯文を飾るといった特徴を持つ。4組5個は鋸歯文をRに揃えており、これらは新段階でも後半に作られたと考えられる。櫟本型の少なくとも一部は唐古・鍵遺跡出土の鋳型外型を使って作られたのであろう。

[突線鈕式]

3例ある突線鈕式の四区袈裟襴銅鐸はすべて六区袈裟襴文銅鐸の変種と考えられるので、一对耳四区袈裟襴文銅鐸が銅鐸群を構成していたのは扁平鈕式新段階で終焉する⁷³。

73 難波洋三 1986、143頁。

扁平鈕式新段階の銅鐸群

上述の通りM1130を含む櫟本型は、扁平鈕式新段階の中で亀山型とともに一對耳四区袈裟文銅鐸の系列に属する銅鐸群であった。櫟本型は亀山型などと同様に突線鈕1・2式の銅鐸群との系譜関係が確認できず、系列は途絶する⁷⁴。

次に扁平鈕式新段階の銅鐸群について見ていくことにする。扁平鈕式新段階には10以上の銅鐸製作工人集団が併存しているが、その製作工人集団の間には目立った優劣はなく、この状況は突線鈕2式で近畿式・三遠式が成立するまで大きく変化することなく続いていく。この段階の銅鐸は140個余りを数える⁷⁵。

[桜ヶ丘4・5号鐸型][六区袈裟文銅鐸正統派]

4個ある桜ヶ丘4・5号鐸型は、菱環鈕式や外縁付鈕1式と共通する古い特徴を持つ復古調の銅鐸群で、菱環が外寄りの位置にある、菱環が厚い、菱環の外斜面と内斜面が別の文様帯になっている例がある、鈕孔が大きい、身は反りがないかやや外に張る、区画内に絵画を鑄出す、裾が狭い、裾の型持痕が低い台形である、鱗の幅が著しく狭い、横帯を上下に分割するなどの特徴を持つ。



図23 桜ヶ丘4号銅鐸
神戸市立博物館蔵

扁平鈕式新段階の中心となったのは、この桜ヶ丘4・5号鐸型を祖型とする六区袈裟文銅鐸正統派^{みょうどう}で、この段階の銅鐸141個の6割以上を占めている。六区袈裟文銅鐸正統派^{うるか}は単独の銅鐸群ではなく、その中に横帯分割型、名東型、加茂岩倉8号鐸型、閭賀型、飾耳のない型、竹之内型といった多くの銅鐸群を含んでいる。1a式のほとんどは下辺横帯の下^{うるか}の界線が3条で、R鋸歯文とL鋸歯文を混用するが、2式の多くは下辺横帯の下^{うるか}の界線が4条で鋸歯文をRに揃える。また、1a式には横帯が縦帯よりも目立って細い例が多く、区画の上下幅の広いものが多いが、2式になると横帯と縦帯の幅がほぼ等しい例が多くなり、区画の上下幅は狭くなる。

六区袈裟文銅鐸正統派の中でも桜ヶ丘4・5号鐸型を直接の祖型とする横帯分割型^{うるか}⁷⁶

74 系列が途絶してしまったと考えられる銅鐸群の製作工人の中には、優位の工人集団の下で下級工人として働くことになったものや、銅鐸生産を許されず他の小型青銅器のみを製作するようになった工人集団などもあったと考えられる(難波洋三 2011a, 106頁)。

75 難波洋三 2021, 32-33頁。

76 横帯を上下に二分し各々を一つの文様帯としたもので、突線鈕1・2式まで続いた。扁平鈕式新段階で飾耳のないものをA類、あるものをB類とし、鱗が通常通りの1帯のものをB1類、内外2帯に分割したものをB2類とする。突線鈕式では外周突線がないものをC類、あるものをD類に分け、さらに身の突線の構成がC類に似たものをD1類、三遠式の多くと共通するものをD2類とする。A類→B1類→B2類→C類→D1類→D2類と展開した。

4個は、最も精作で大型品が多く、最有力の銅鐸群で、後には三遠式や近畿式の成立に重要な役割を果たした。



図24 生駒銅鐸
(横帯分割型B2類)
国立歴史民俗博物館蔵

六区袈裟襷文銅鐸正統派の中で四区袈裟襷文銅鐸と共通する特徴が目立つのが、4個ある一対耳の加茂岩倉8号鐸型で、飾耳の縁が幅広い斜面になっている、裾の型持が縦に細長くその多くは頂部が丸い、全高約46cmと通常約42cmの六区袈裟襷文正統派より一回り大きい、裾が広い、菱環の幅が広く、かつ鈕頂で広いが舞近くで狭くなっておりその差が大きいといった六区袈裟襷文銅鐸正統派としては特異な特徴を多く持つ。全高が約46cmなのは、同じ頃に作られた流水文銅鐸や四区袈裟襷文銅鐸の規格を採用したからである。上記の飾耳の縁や裾の型持の特徴も四区袈裟襷文銅鐸と共通する。



図25 加茂岩倉8号銅鐸
(加茂岩倉8号鐸型)
文化庁保管

一対耳の六区袈裟襷文銅鐸正統派で加茂岩倉8号鐸型に属さない^{うるか}閭賀型が9個ある。この内8個は近畿中南部出土(播磨、紀伊、河内、山城)なので、この地域内で製作されたのであろう。閭賀型の中で六区袈裟襷文銅鐸正統派1式の2個は、下辺横帯下界線が3条でR鋸歯文とL鋸歯文を混用し、飾耳の脚の条数は8条なのに対し、2式の7個は下辺横帯下界線が4条で、鋸歯文をRに揃え、飾耳の脚の条数は9～12条と多くなった例が多い。

閭賀型の一部あるいは加茂岩倉8号鐸型は、四区袈裟襷文銅鐸の櫟本型を祖型とする可能性がある⁷⁷。



図26 閭賀銅鐸(閭賀型)
辰馬考古資料館蔵

77 M1130銅鐸の視点からすると、これを含む櫟本型が他の銅鐸群に影響を与えた可能性を提示された点で重要な指摘といえる。

[渦森型][長者ヶ原型]

三対耳四区袈裟襴文銅鐸の系譜に連なるのは渦森型—長者ヶ原型の系列と、東海派の銅鐸群がある。**渦森型**は全高約46cmとこの段階の四区袈裟襴文銅鐸の中では大型で、すべての区画に四頭渦文^{しとうかもん}⁷⁸を飾り、鈕に三個の双頭渦文飾耳⁷⁹、鱗に三対の半円形飾耳がつく。この渦森型を祖型にして生まれたのが**長者ヶ原型**である。大型で三対耳である点は渦森型と同じだが、鈕に飾耳がなく、その多くは区画内に四頭渦文を飾らない。菱環は渦森型よりも外にあり、鱗幅は渦森型よりも広がるため鋸歯文数も減少している。



図27 渦森銅鐸
(渦森型A類)
東京国立博物館蔵



図28 桜ヶ丘11号銅鐸
(長者ヶ原型)
神戸市立博物館蔵

[東海派]

この渦森型—長者ヶ原型と同じ三対耳四区袈裟襴文銅鐸の系列に連なる銅鐸群に**東海派**がある。東海派は、この段階のものが4個、突線鈕1式のものが7個あり、全高約35cmと小型である。流水文銅鐸が1個と四区袈裟襴文銅鐸が2個含まれている。難波氏は32項目の特徴を列記しているが、このうち三対耳四区袈裟襴文銅鐸や縦型流水文銅鐸から受け継いだと考えられる特徴は、外縁第2文様帯に頂角を外に向けた鋸歯文を飾る例があること、内縁の鋸歯文の特徴、複合縦型流水文を飾る例があること、横帯優先になっていないこと、下辺横帯の上下幅が著しく狭いこと、R鋸歯文とL鋸歯文を交互に配列すること、飾耳の脚の間に綾杉文を飾る例があること、である。こうした特徴は、東海派の銅鐸製作工人が外縁付鈕2式の摂津系の工人集団の系譜を引くことを示している。東海派銅鐸の製作工人集団は扁平鈕式新段階には東海地方よりも西の地域に拠点を置いて活動していたが、おそらく扁平鈕式新段階の末か突線鈕1式の始めに東海地方へ拠点を移したと考えられる。



やまづら
図29 山面1号銅鐸
(東海派A1類)
東京国立博物館蔵

78 螺旋形を描きながら中心から外へ向かって広がっていく曲線文様を渦(巻)文と呼ぶ。銅鐸の装飾において、上下二つの渦文を一続きにし、縦軸を中心に線対称にすると四頭渦文ができる。

79 四頭渦文の左右の半分ずつが双頭渦文で、これを飾耳としたもの。

[加茂岩倉35号鐸型]

東海派の影響を受けた可能性があるのが加茂岩倉35号鐸型の3個である。縦帯が下ほど広くなっており、横帯も下のものほど上下幅が広く、斜格子文がこれに合わせて下ほど粗いなど特異な特徴が目立つが、縦帯と横帯が互いに貫いて交差すること、下辺横帯の上の界線が2条であること、飾耳の脚の間に綾杉文を飾ることなどは東海派と共通する。下区に四頭渦文を飾り、上区を複線で小区画に分割する特徴は、渦森型—長者ヶ原型の系列からの影響の可能性が高い。3個の銅鐸の内の2個の菱環の内界線が3条で下辺横帯の下界線が4条になっているのは六区袈裟襷文正統派の影響であろう。

[その他の四区袈裟襷文銅鐸]

なお、この段階の四区袈裟襷文銅鐸には、類例がないので単独の銅鐸群として扱っていない出土地不明名古屋市博物館蔵鐸などの例もある。この銅鐸の菱環の付け根に平行線を3条飾る特徴は、六区袈裟襷文正統派2式からの影響であり、鋸歯文をRに揃えていることも含め、これが扁平鈕式新段階末に作られたことを示している。

[明石型][高住型]

扁平鈕式新段階になると横型流水文銅鐸の系列の凋落が著しく、^{あけし}明石型と高住型がそれぞれ1個あるのみである。明石鐸は扁平鈕式古段階の有本型の特徴を多く残しており、本来は鰭に三対の半円形飾耳があり、鈕に三個の双頭渦文飾耳があったようだ。鰭幅が次第に広くなるとともに鰭の鋸歯文が減るという変化は、(安仁型→)渦森型→長者ヶ原型と続く三対耳四区袈裟襷文銅鐸の系列と共通する。

高住鐸は身に迷路派流水文を飾ることを除けば六区袈裟襷文銅鐸そのものといえる。鰭を飾る一対耳の飾耳の脚の条数は、14条と扁平鈕式新段階の銅鐸の中でも特に多く、鋸歯文はRに揃えており、下辺横帯の下界線は4条である。高住鐸は扁平鈕式新段階でも末に作られ、突線鈕1式の迷路派流水文銅鐸の祖型になった。高住型の成立にあたっては、迷路派流水文銅鐸と六区袈裟襷文正統派の製作工人集団の統合があったと考えられる。



図30 明石銅鐸(明石型)
京都国立博物館蔵

以上見てきたとおり、扁平鈕式新段階には10以上の銅鐸製作工人集団が併存していたが、突線鈕式になると、最終段階の三遠式と近畿式へと繋がっていく系列もあれば、扁平鈕式新段階で終焉してしまう系列もある。前者には横型流水文の系列の明石型—高住型、三対耳四区袈裟襷文銅鐸の系列の東海派、六区袈裟襷文銅鐸正統派の中の横帯分割型と飾耳のない型があり、後者の終焉してしまうものには一対耳四区袈裟襷文銅鐸の系列の亀山型と

M1130を含む櫟本型、三対耳四区袈裟襷文銅鐸の系列の渦森型—長者ヶ原型、加茂岩倉35鐸型、六区袈裟襷文銅鐸正統派の加茂岩倉8号鐸型、閏賀型、竹之内型がある。

M1130は扁平鈕式新段階でも後半の製作と考えられるので、一对耳四区袈裟襷文銅鐸の系列の最後の段階に位置づけられる。M1130を一人の人間に例えるならば、同時代には10家族以上が暮らしており、兄弟姉妹は7人だったが誰も子孫は残さなかったというようなイメージだろうか。

補遺——もう一つの銅鐸

愛知県美術館は川崎小虎(1886-1977)の《銅鐸》(1962年)という題名の日本画を所蔵している(図31)。旧愛知県文化会館美術館時代の1977年に寄贈を受けた作品である。この作品について小虎自身は次のように語っている。「土中からの発掘品である。遠い歴史を秘めて今もなお美しい姿を残すのは不思議なものである。このような物に命を与えて物言わぬ鐘から声を聞きたいと思った」⁸⁰。

今あらためてこの日本画に描かれた銅鐸を見てみると、小判形の鈕の形状などから一見して突線鈕式であることがわかる。鰭には脚のない3対の半円形重弧文飾耳が、鈕には3つの双頭渦文の飾耳がつく六区袈裟襷文銅鐸である。鈕に双頭渦文の飾耳がつくのは近畿式の特徴でもある。袈裟襷文のうち、中縦帯のみが左右に分割されている、左の縦帯がないという特徴を持つ。身の上部と舞の型持孔は丸く、裾の型持痕は長方形である。鈕の外縁は二つの文様帯に分かれており、どちらも鈕孔に頂点を向けた鋸歯文、内縁は鈕孔に曲線を向けた重弧文で飾られている。菱環はD | Cの綾杉文で、DとCの間には界線がある。鰭は身に頂点を向けた鋸歯文を飾り、下端は身の下端よりも上にある。下辺横帯にも鋸歯文を飾り、下辺横帯下の界線は4条である。外周突線が1～2条で身の区画に突線を用いているので突線鈕2式の銅鐸を描いていることがわかる。モデルとした銅鐸がどこの何であったか不明であるが、小虎は制作年の1962(昭和47)年に関西方面を旅行しているの、旅先のどこかで見たものであろうか⁸¹。この年の第5回日展の出品作である。

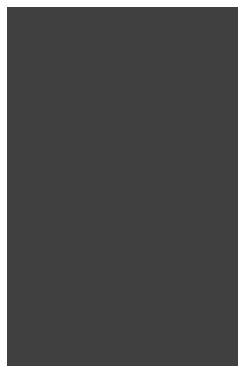


図31 川崎小虎《銅鐸》

M1130の銅鐸は扁平鈕式新段階の銅鐸であり、この段階では銅鐸群が10以上あった。次の突線鈕式の段階でそれらは《銅鐸》のような近畿式と三遠式に集約・統合され、やがて終焉を迎える。愛知県美術館所蔵の二つの銅鐸で銅鐸全体を語るには所詮無理があるが、次第に裝飾性が強くなっていくという展開の方向性だけは理解できるのではなかろうか。

80 「私の年譜と作品」『川崎小虎作品集』(『川崎小虎と東山魁夷展』図録、NHKプロモーション、NHK、2007年、No.36作品解説より引用)。

81 左右に縦帯がない、縦帯を左右に分けない、横帯が優先である、身の型持孔が方形であるといった違いがあるが、全体の形状からの兵庫県川西市出土の満願寺銅鐸(突線鈕2式)がモデルに近いと思われる。

おわりに

銅鐸は歴史を秘めているからこそ不思議でもあり魅力でもある。M1130の銅鐸を目の前にし、それを注文した人、作った人、使った人、埋めた人、発見した人、掘り出した人、売った人、買った人と、この銅鐸にどれだけ多くの人々が関わってきたということに思いを馳せる。原料のことまで考えれば、遙か大陸で鉱石を彫った人夫にまで視野が広がっていく。

2006年、当時京都国立博物館に勤務されていた難波氏にM1130の銅鐸を調査していただいた際、氏は図版でもお目にかかったことのない初めて目にする銅鐸と対面することとなった。初見という点では新たに出土した銅鐸を目にしたのと同じである。それにもかかわらず速玉神社のものが一番近いとか扁平鈕式であるということをその場で指摘された。専門家だからと言ってしまえばそれまでだが、初出の銅鐸に出くわしても、それがどのような銅鐸として位置づけられるのか、類例にはどのようなものがあるのかといったことが即答できるまで銅鐸の型式学的研究は進んでいたのである。まったくの門外漢であった当時の筆者にはそんなことを知る由もなかった。

本来であれば専門家である難波氏に執筆していただくべきものであり、考古学研究者でもない一介の学芸員が銅鐸について執筆することに抵抗がないわけではなかった。調査後に難波氏がわざわざ送ってくださった二つの文献には目を通したものの、基本的な知識がなかったので内容をよく理解できなかったり、一度学習してもすぐに忘れてしまったりという状況のまま10数年が過ぎてしまったが、やっと筆者なりの恩返しができたと思っている。今回あらためて計測した法量のデータや観察の記録は、今後の銅鐸研究のために役立てば幸いである。

言い訳がましくなるが、筆者は網羅的に参考文献を調べたわけではないので、引用した文献が必ずしも初出であるとは限らないことをお断りしておきたい。

最後になるが、難波洋三氏にはM1130の調査報告の掲載をはじめ、同氏の執筆した論文からの写真や図版の再録についてご快諾いただいた。また、文献を紹介していただくなど本稿執筆に際してご教示をいただいた。ここに深く感謝する。

参考文献

- 井上洋一 2003 「銅鐸」『考古資料大観 第6巻 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品』小学館、2003年、140-148頁
- 井上洋一 2012 「特別展「出雲―聖地の至宝―」の“奇妙な”銅鐸」東京国立博物館1089ブログ、2012年11月02日
- 北島大輔 2002 「弥生青銅器の生産と流通―伊勢湾沿岸を舞台として―」『川から海へ1―人が動く・モノが運ばれる』一宮市博物館、2002年、55-65頁
- 佐原真 1960 「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系 第2巻 日本Ⅱ 弥生時代』平凡社、1960年、92-104頁
- 難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究 6.道具と技術Ⅱ』雄山閣、1986年、132-145頁
- 難波洋三 1991 「同范銅鐸2例」『辰馬考古資料館 考古学研究紀要2』辰馬考古資料館、1991年、57-109頁、V1-13
- 難波洋三 2000 「銅鐸は何個作られたか？」『博物館Dictionary』No.75、京都国立博物館、2000年12月9日
- 難波洋三 2002 「八王子銅鐸の位置づけ」『銅鐸から描く弥生時代』（佐原真、金関恕編）学生社、2002年、74-96頁（難波洋三 2001 「八王子銅鐸の位置づけ」『市制80周年記念シンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」予稿集』一宮市博物館、2001年、69-76頁に加筆）
- 難波洋三 2003 「徳島市出土の特徴的な銅鐸について―亀山型と名東型―」『徳島市立考古資料館 開館5周年記念 シンポジウム 銅鐸の謎をさぐる―講演・報告要旨―』徳島市立考古資料館編、2003年、1-21頁
- 難波洋三 2006 「花入などに転用された銅鐸」『京都国立博物館だより』149号、2006年1・2・3月号
- 難波洋三 2009 「唐古・鍵遺跡で作られた銅鐸」『田原本町文化財調査報告書 第5集「唐古・鍵遺跡Ⅰ―範囲確認調査―特殊遺物・考察篇」』田原本町教育委員会、2009年、241-272頁
- 難波洋三 2011a 「銅鐸群の変遷」『【大阪府立弥生文化博物館図録45】第2回大阪・滋賀博物館連携企画「銅鐸を探る」平成23年度夏季特別展 豊饒をもたらす響き 銅鐸』大阪府立弥生文化博物館、2011年、80-109頁
- 難波洋三 2011b 「銅鐸、花器として生きる」『古代はいま よみがえる平城京』奈良文化財研究所、2011年、175-193頁
- 難波洋三 2021 「突線鈕1・2式銅鐸とその相互関係」『令和3年度 秋期企画展展示図録 大岩山銅鐸の形成―近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の成立と終焉―』野洲市歴史民俗博物館、2021年、31-50頁
- 春成秀爾 1982 「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告 第1集』国立歴史民俗博物館、1982年、1-48頁
- 森田稔 2003 「鑄型と鑄造技術」『考古資料大観 第6巻 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品』小学館、2003年、325-330頁

図版出典

- ・ 難波洋三 2009、写真2-2、4-1、5-1
図18、25、26
- ・ 難波洋三 2011a、図1
図19
- ・ 国立文化財機構所蔵品統合検索システム
図20 https://colbase.nich.go.jp/collection_items/kyuhaku/J271?locale=ja
図22 https://colbase.nich.go.jp/collection_items/kyohaku/J甲463?locale=ja
図27 https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-23713?locale=ja
図29 https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-803?locale=ja
図30 https://colbase.nich.go.jp/collection_items/kyohaku/J甲232?locale=ja
- ・ 神戸市立博物館提供
図21、23、28
- ・ 国立歴史民俗博物館提供
図24